The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Le Parangon de nouvellesの特徴と問題点 : フランス、1531年、nouvelle
Author(s)	平手, 友彦
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78175
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Le Parangon de nouvelles の特徴と問題点
— フランス、１５３１年、nouvelle —*

平手 友彦**

Le Parangon de nouvelles honestes et delectables (Paris et Lyon 1531), recueil de nouvelles empruntées aux traductions françaises du *Decamerone* de Boccacio, *Facetiae* de Poggio, *Ulenspiegel, Apologues* ésopiques de Laurent Valla, est plus qu'un simple florilège, c'est un ≪modèle≫ qui résulte d'une comparaison entre différents types existants. Ce qui est le plus important, donc, pour révéler le sens de l'œuvre, c'est d'examiner l'intention de rédaction du compilateur: ≪utilité avec delectation≫, son choix de nouvelles, et la transformation des nouvelles choisies. Et puis, dans ce recueil peu connu on se heurte à quelques problèmes: chronologie des diverses éditions, sources (surtout d'*Ulenspiegel* en français), ordonnance des nouvelles, et influence italienne. En ce qui concerne les sujets que le compilateur a choisis, on y trouve amours, y compris des histoires de maris bernés (antiféminisme), satire des diverses professions, ripostes astucieuses, scatologie d'Ulenspiegel, exemples merveilleux de vertu, et tragédies. L'intention évidente de faire un chef-d'œuvre de cette variété d'histoires nous amène à penser que le *Parangon* témoigne d'un moment important de l'histoire de la narration brève en même temps qu'il constitue un indice pour découvrir la création littéraire de la génération rabelaisienne.

*Quelques aspects et problèmes sur *Le Parangon de nouvelles* – France, l'an 1531, nouvelle – (Tomohiko HIRATE)

**言語文化研究科博士後期課程

1 Nouvelle

"先進国"イタリアがフランス・ルネサンス文学に与えた影響は計り知れないものがあることはよく知られている。散文、とりわけ≪novella≫と呼ばれるジャンルでは Boccaccio の *Il Decamerone*(1350 年頃) は 15 世紀から 16 世紀にかけてフランスに数多く現れた nouvelle 集の源である。

1462 年頃 ANONYME: *Les cent nouvelles nouvelles*
1475 年頃 ANONYME: *Evangiles des Quenouilles*
1515 年 P. de Vigneulles: *Cent nouvelles nouvelles*
1531 年 ANONYME: *Le Parangon des nouvelles honestes et delectables*
1536 年 N. de Troyes: *Le Grand parangon des nouvelles nouvelles*
1537 年 ? J. Flore: *Comptes amoureux*
1549 年 La Motte Roullant: *Les Fascetieux deviz des cent nouvelles nouvelles*
1554 年 ANONYME: *Plaisantz et facetieux Devitz tres recreatifz et fort exemplaires*
1555 年 A.D.S.D.(Antoine de Saint-Denis?): *Les comptes du monde adventureux*
1555 年 ANONYME: *Les joyeuses adventures et plaisant facetieux deviz*
1557 年 ANONYME: *Les joyeuses narrations advenues de nostre temps*
1558 年 B. Des Périers: *Nouvelles recreations et joyeux devis*
1559 年 Marguerite de Navarre: *Heptaméron*
1575 年 ANONYME: *Les joyeuses aventures et nouvelles Recreations*

これら nouvelle 集の中には新たに創作されたものではなく、それ以前の作品の中からそのまま選び取られ、またはその主題を借りて焼き直された nouvelle を集めて一つの作品としたものもある[1)]。それではそもそも≪nouvelle≫とは一体何なのか。*Decamerone* の≪novella≫が密接に関係していることは言うまでもないが(上記二種の *Cent nouvelles nouvelles* の著者は *Decamerone* のことを≪Boccace des Cent Nouvelles≫と呼んでいる)、フランスでの nouvelle 集の出発点ともなる

[1] 上記 nouvelle 集の構成と系統については参考文献中の K.Kasprzyk, L.Loviot, G.A.Pérouse の各研究を参照。

15 世紀の *Les cent nouvelles nouvelles* 中の nouvelle の概念を分析した R.Dubuis は、そこに「本当の話であること」、「最近の出来事に基づいた話であること」、「簡潔に語られていること」、「語るに値していること」の四つの特徴を認めた[2)]。また G.A.Pérouse は nouvelle を「ある一つの社会、一つの集団から生まれた現実感を持った語り」としている[3)]。つまり、単に「中編（短編）小説」と言うような話の長さだけが問題なのではなく、語られる内容の現実性も大きな特徴と言える。

1531 年に Paris と Lyon で出版された *Le Parangon des nouvelles honestes et delectables*（以下、*Parangon*）は題名に≪nouvelles≫とあるにも関わらず、そこに含まれているのは *Decamerone* のような novella だけでなく Poggio の facetia、*Ulenspiegel* の histoire、L.Valla による apologue ésopique であった。このことは 1531 年の時点では≪nouvelle≫の語の意味が十分に明確化されていなかったことを示しているのではないか。そもそも筆者が≪nouvelle≫に興味を持ったのは Rabelais の物語成立にどれほどこのジャンルが関与しているかであった。この nouvelle の持つ「現実」を語りの中に組み込んでいく力が、様々な文学的材料をパッチワーク的に寄せ集めて作られた *Pantagruel* と *Gargantua* 両物語の「現実」と具体的、また、方法論的にどの様な関係を持つか、更に、近代の小説成立に何等かの関係を持っていないだろうか、ということであった。その意味では、*Pantagruel* の最も古いとされている版（1531 年、32 年説有り）の前年または同年に出版されている *Parangon* は、たとえ既に存在していた仏語訳 nouvelle の寄せ集めであるとしても、また逆に寄せ集めであるが故に Rabelais の作品と nouvelle の関係性を探る上で、また、少なくとも Rabelais のジェネレーションの文学的嗜好を知る上で興味深い作品と言えるであろう。なぜならこの *Parangon* 以降「nouvelle 傑作集」は上記の様に本格的発展を遂げて行くのであるから。本論ではこのあまり知られていない nouvelle 傑作集 *Parangon* の様々な特徴と問題点を整理してみ

---

[2] Dubuis R., "Le *Parangon* et la tradition médiévale du récit bref", IN *Le Parangon de Nouvelles*, édition par G.A.Pérouse, Genève, Droz, 1979, pp.XXXII-XXXIII（参照 Dubuis R., *Les Cent Nouvelles nouvelles et la tradition de la nouvelle, en France, au Moyen Age*, Grenoble, P.U.G., 1973）

[3] Pérouse G.A., *Nouvelles françaises du XVIe siècle*, Genève, Droz, 1977, p.25. さらに詳しい定義の試みは同じく G.A.Pérouse の"De Montaigne à Boccace et de Boccace à Montaigne", in *La Nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp.13-14 等。

たい[4]。

2 Edition の問題

Parangon は 1531 年に Paris と Lyon で出版され、G.A.Pérouse らは Paris で出版された版（B版：出版元不明）は Lyon で出版された版（M版：出版元 Denys de Harsy 、書店 Romain Morin ）の海賊版であるとした[5]。ところが民衆本の研究家 P.Verhuyck と J.Koopmans の側から異論が唱えられた。彼らは B版の colophon に記されている住所から書店先は Jean Longis としたが（ここまでは G.A.Pérouse らと同見解）、Longis は P.Renouard の *Répertoire des imprimeurs parisiens* にもある通り「書店」にすぎない[6]。そこで出版先はこの Jean Longis と協力関係にあった Denis Janot のファミリーである A.Lotrian と特定した[7]。更にここでは *Parangon* において初めて *Ulenspiegel* が仏語に訳出されたと考えた G.A.Pérouse らの主張も問題にされてくる[8]。そもそも後述するように *Decamerone* 、*Facetiae* 、Valla の *Apologues* からは既に仏語訳されたものを使用しており、*Parangon* のためにだけ *Ulenspiegel* 5 篇をわざわざ仏語訳するとは考えにくい。やはり *Ulenspiegel* も既に存在していた仏語訳を使ったと考えるのが自然であろう。Verhuyck と Koopmans は従来 1539 年に Anvers で出版されたと考えられてきた仏語訳 *Ulenspiegel* の出版年は実は 1529 年の誤りであり、さらに、*Parangon* B版と「1529 年版」*Ulenspiegel* の飾り文字の一致等から、この仏訳版はフランス書物と縁深いこの Anvers で 1529 年に出版されたフラマン語訳おそらくは仏語訳であった *Ulenspiegel*（現存せず）をもとに、1530 年頃 Paris の A.Lotrian が出版したものとした。そして A.Lotrian は自ら出版したこの仏語訳

[4] テクストには *Le Parangon de nouvelles*, édition critique par G.A.Pérouse et autres, Genève, Droz, 1979 を使用。

[5] *Ibid*, p.xii

[6] Renouard P., *Répertoire des imprimeurs parisiens*, Paris, Minard, 1965, p.284

[7] Koopmans J. & Verhuyck P., *Ulenspiegel de sa vie de ses œuvres*, Antwerpen, Uitgeverij C. de Vries-Brouwers bvba, 1988, pp.89-91

[8] *Le Parangon de nouvelles, op.cit.*, p.viii; Lefebvre J., "La source Allemande dans le *Parangon*", in ibid., p.lxviii. この主張に関しては M. Simonin が既にその書評の中で批判し、仏語訳 *Ulenspiegel* の A.Lotrian 出版説(1530 年頃）を打ち出している。Simonin M., "Compte rendu du *Parangon de nouvelles*", in *Réforme Humanisme Renaissance* No.9, 1979, pp.86-87.

Ulenspiegel と、当時手元にあった *Decamerone*、*Facetiae*、Valla の *Apologues* の仏語訳を利用して *Parangon* を出版、この海賊版を Denys de Harsy が Romain Morin のために作ったものがM版であるとした。つまりこの二人の学者は Paris B版の先行説を取っている[9]。確かに、B版とM版の両版とその元になっている仏語訳各原典の variantes を比較するとM版には文法的誤り及び誤植が多く、圧倒的にB版が各原典に近いことがわかる[10]。尚、Verhuyck と Koopmans 両学者は最近 1531 年版仏語訳 *Ulenspiegel*（彼らはこの版の出版元を Lyon の Olivier Arnouillet と特定）、出版年不詳の Paris 版 *Parangon*（少々強引に 1531 年頃と特定）を発見し、上述の仮説を裏付けようとしているが、これら二つの版の発見は逆にM版の先行説を再燃させる結果に終わっているようにも思われる[11]。以下に *Parangon* の諸版を整理しておく。

1. 1531 (M) Lyon, Denys de Harsy pour Romain Morin
    1. B.N., Rés. Y^2 1981-1982
    2. Arsenal, 8° B.L.19009
    3. B.M. Poitiers, D.R.212[12]
2. 1531 (B) Paris, (Alain Lotrian pour Jehan Longis?)

---

[9] Koopmans J. & P.Verhuyck,*op.cit.*, p.86-96. 宮下志朗氏はこの *Ulenspiegel* の問題を紹介されている。宮下志朗『本の都市リヨン』（昌文社）1989 年、p. 192、p. 410。宮下志朗「フランス語版『ティル・オイレンシュピーゲル』の謎」（岩波書店『図書』1990 年 5 号、pp. 2-7）。

[10] 具体的に指摘はしないが計 18 箇所。また逆にB版の誤植は p.56, l.32 の 1 箇所のみである。また、NO.13 の nouvelle はB版M版両方の版で「十二番目の」nouvelle と間違っているが、もしB版がM版の後に「原典により忠実な」海賊版として作られたならば他の誤植と一緒にこれも直されていたと考えるのがより自然だろう。

[11] Koopmans J. & Verhuyck P., "Le Parangon de nouvelles et l'Ulenspiegel français à Paris et à Lyon", in *Bibliothèque Humanisme Renaissance* t.LII, 1990, pp.97-104. しかし彼らが"発見"としている 1531 年版 *Ulenspiegel* の存在は既にその前年にこれまた M.Simonin が Masuccio に関する論文の中で指摘している。Simonin M., "De Masuccio aux Comptes du monde adventureux", in *L'Ecrivain face à son public en France et en Italie à la Renaissance*, Actes du Colloque International de Tours (1986), Paris, J.Vrin, 1989, p.42

[12] G.A.Pérouse らはこの三つの exemplaire しか挙げていないが *Catalogue des livres de M.Arnaud Cigongne*, Paris, L.Potier, 1861, p.354 と Delisle L., *Chantilly. Le Cabinet des livres imprimés antérieurs au milieu du XVIe siècle*, Paris, Plon, 1905, p.300 に記されている Chantilly の *Parangon* は記述からこれら三つの版と同一の物と思われるが一体何なのだろうか。

1. Arsenal, 8° B.L.19010

3. 1532 Lyon, Denys de Harsy pour Romain Morin
(édition citée par Brunet et Baudrier, non retrouvée)
4. 1533 Lyon, François Juste
(édition citée par Brunet et Mabille, non retouvée)
5. [s.d.] Paris, (dynastie Trepperel?)

1. Bibliothèque du duc Auguste QuH171

3 編纂者

≪Parangon≫という語には「模範」、「比較」の二通りの意味があり、nouvelle 集 *Parangon* については、その選集という特徴から、数多くの nouvelles を「比較」し、その中から nouvelle の「模範」的作品を選び出して「模範」集を作ったと解釈することが出来るだろう。作品自体は *Decamerone* から 15 の novella, Poggio より 20 の facetia, L.Valla の *Apologues* からは 7 の fable 、そして *Ulenspiegel* からは 5 の histoire をそれぞれの仏語訳版から取って 47 の nouvelle から構成されている。従って、この作品を論じる場合には、一つ一つの nouvelle の文学的特徴から作者の文学性を検討するのではなく、むしろどの様な nouvelle を選び、どの様な「模範」集を作り上げたかという編纂者の意図が重要になってくる。そこには当然売れる作品集を作りたいという意識も働く。例えば Dantes や Giotto といった有名人を登場させている nouvelle（後述の表参照）が見られるのもその証拠かもしれない。幸いなことに、この編纂者は自らの「編纂方針」を残してくれている。それは *Parangon* のタイトル、プロローグ、そしてエピローグである。勿論この編纂者の意見表明が 47 の nouvelle の内容と完全に一致するとは言い切れないが、少なくとも編纂者の意図を考える一つの助けにはなるだろう。

タイトルには「おふざけの中に新しい事や気晴らし(Choses nouvelles & Recreatives)を見つけたがっているあらゆる人への気高くそして楽しい(Honestes & delectables)ヌーベル、また実際に気晴らしや気の利いた事が好きな人に役立つ(Utiles & proffitables)ヌーベル」[13] と nouvelle の選択基準と想定読者層が読み取れる。次にプロローグでは二つの事が明らかになる。一つは Françoys Petrarque

[13] *Le Parangon de nouvelles, op.cit.*, p.xi; p.cx

の意見を引いて退屈や疲れには気晴らし(interposition de esbatz)が一番であり、悲しい時には話すことでその悲しさを忘れることができるし、気の利いた面白い話(dictz et parolles facetieuses et recreatives)を聞けば楽しくもなるだろうということ。また一つは楽しさと有用性を(utilité avec delectation)うまく混ぜ合わせるのが肝心であり、誇り高き人(l'homme eslevé en dignité)であればあるほどこの二点を求めようとすること[14]。更にエピローグでは「とりわけこれらの気高く面白い(honnestes et facecieuses)ヌーベルを徳化して(moralisant)役立てようとする人々の為のヌーベル」[15]と想定読者について言及している。この編纂者の声からは、商売人としての読者層への宣伝効果を差し引いて考えても、「楽しくて何か役に立つ nouvelle」を集めたということが判る。そして編纂者はこれらの nouvelle を≪bons aucteurs≫から集めたことをプロローグの中で明確に述べている[16]。

4 *Parangon* の nouvelle

４７の nouvelle の出典、内容を配列順に一覧表にすると以下の通りになる。尚、出典の後の数字は注７、１８に挙げる原典テクスト中の位置を示す。

NO	出典	内容
1	Décaméron 5-9	貴族と人妻の恋、富よりも寛大純粋誠実さが大切
2	Facéties 55	馬鹿者丸薬を使って医者になりすます
3	Facéties 94	去勢男を紹介されこれを拒絶する老未亡人
4	Facéties 70	１２ヶ月で子供ができると妻にだまされた夫
5	Décaméron 8-5	だらしのない裁判官、いたずらをされて街を追放
6	Facéties 19	間の抜けた兵士に上官の鋭い叱責、兵士を風刺
7	Facéties 20	長ほう祭服と去勢鶏を間違えた司祭、宗教界を風刺
8	Décaméron 4-10	妻にだまされた医者が妻の愛人を救う、医者を風刺
9	Facéties 26	主任司祭強欲な司教に一杯食らわせる
10	Facéties 29	田舎者遅すぎた助言を受けるがそれは実は当り前の事

[14] *Ibid.*, pp.1-2
[15] *Ibid.*, p.163
[16] *Ibid.*, p.2

11	Décaméron 6-4	窮地に立たされた料理人、主人に対する巧妙な返答
12	Facéties 35	托鉢修道士に填められた医者、修道士批判
13	Facéties 36	姦通を犯した妻への皮肉をこめた罰
14	Décaméron 6-5	法律家 Rabatta の椰ゆに対して見事に答える Giotto
15	Facéties 41	皮肉を言う相手をやりこめる Dantes の見事な返事
16	Facéties 42	皮肉っぽい質問に対する Dantes の素早く巧みな返事
17	Décaméron 7-2	妻と瓶売りになりすましたその愛人にだまされる大工
18	Décaméron 4-7	あきぎりの葉の毒で死んだ糸紡娘と奉公人の悲劇
19	Facéties 51	稟しょくなペルージア人葡萄酒を与えまいと嘘をつく
20	Décaméron 7-6	二人の愛人を持つ騎士の妻、嘘で浮気発覚を防ぐ
21	Facéties 71	女性の夫への偽善的忠実さを皮肉る
22	Facéties 74	喉の渇きは治療の必要なしと医者に言う大酒飲み
23	Décaméron 9-8	小さな嘘が後で災いとなって自分の身にふりかかる
24	Facéties 75	風を送れと言われてオナラで風を送る枢機卿の書記
25	Facéties 76	妻への手紙と商人への借金返済の手紙を送り間違える
26	Décaméron 10-3	勇敢な支配者の苦悩を見て自らを反省するライバル
27	Facéties 81	床入りがうまく行かない新郎友人に頼み謝礼を渡す
28	Facéties 87	メロンになれば皆が尻を触ってくれると答えた若者
29	Facéties 107	音楽に興奮する妻に困って、止めるように頼む老亭主
30	Décaméron 9-6	暗闇に乗じて二人の若者に妻と娘を寝取られる主人
31	Facéties 50	高価ではあるが役に立たない物に執着する公爵を批判
32	Ulenspiegel 11	阿呆を嫌う博士に下剤を飲ませ懲らしめるスカトロジ
33	Décaméron 4-5	兄弟に殺された恋人の首を瓶に隠し持つ娘の悲劇
34	Ulenspiegel 23	くそで予言の実を作りユダヤ人をだまして一儲け
35	Décaméron 8-2	お金を貸すと言って人妻をだまし寝取る司祭
36	Ulenspiegel 42	母との面会・ペギン会老婆を脅かして帰らせる
37	Ulenspiegel 44	病床の Ulenspiegel は司祭の腹黒さを暴露、スカトロジ
38	Décaméron 1-3	宗教の優劣という難問に答えたユダヤ高利貸しの才知
39	Ulenspiegel 45	石ころの遺産・Ulenspiegel の遺体うつ伏せで棺に
40	Décaméron 2-1	埋葬の奇跡と法衣を着る羽目になった三人の若者

41	Apologues 12	自分の専門領域に留まるべき（ロバと狼）
42	Apologues 13	災難は学問、自らの境涯に満足すべし（羊飼いと海）
43	Apologues 15	身内を労らない者の侮辱は堪え得る（ウズラと雄鶏）
44	Apologues 20	大を当てにして手中の小を捨てる（漁師とニシン）
45	Apologues 21	大きな者は小さな者と共同すれば安全（馬とロバ）
46	Apologues 28	自分の生活は予言できない占い師（占い師）
47	Apologues 33	自分の身に降り懸かった災難を苦にするな（禿頭）

4.1 原典と編纂者による変更

Parangon 編纂者が使用したと思われる L.Premierfait の仏語訳 *Décaméron*（1414年版が最古）、G.Tardif の仏語訳 *Facéties*（1496年以前）、同じく G.Tardif による Valla の *Apologues* の仏語訳（1490年頃）は、1531年当時数多くの版が流布しており（例えば1531年以前に少なくとも *Décaméron* と *Facéties* はそれぞれ三つの版が存在したことが確認されている）[17]、また当然のことながら写本も多く存在していた。従って編纂者が実際に使用した版を厳密に特定することは困難であり、ここでは *Parangon* の校訂者の校合[18]に従って検討を進める。まず第一に Vérard 版 *Décaméron* と Tardif 訳 *Facéties* の両仏語版に付け加えられ、*Apologues* にも伝統的に付けられていた≪moralité≫と呼ばれる一種の「話のまとめと教訓」が全て削除されていることが注目すべき点だろう。L.Sozzi はこの点に関して教訓化に対する物語の自律、現実への偏見のない分析、面白く読ませようとする意識が編纂者の側にあったのだろうとしている[19]。しかし、それだけではなく編纂者の美的意識も働いたのではないか。つまりただでさえ様々な長さの話を集めているのだからこれらにそれぞれ短い一文が入るとバランスが悪くなってしまう。続けて L.Sozzi は編纂者がエロチックな、わいせつな nouvelle を避け文学的品性の高い作品を目指していると分析しているが[20]、それならば *Ulenspiegel* の

[17] Sozzi L., "Les sources italiennes du *Parangon de Nouvelles*", IN *ibid.*, p.xliii; p.xlv
[18] *Parangon* の校訂者である G.A.Pérouse らは 1485 年の Vérard 版 *Décaméron*(B.N. Rés.Y2402)、Olivier Arnoullet 版 *Facéties* (B.M. de Grenoble E30111)、1492 年の Vérard 版 *Apologues* (B.N. Vélins 611)を使用。*Ibid.*, pp.c-ci
[19] Sozzi L., *op.cit.*, p.lxi
[20] *Ibid.*, p.lxii.*Parangon* に採用された nouvelle の中にも所謂きわどい描写が削除されている。例えば NO.17 に見られるパゾリーニの映画『デカメロン』でも取り上げられた瓶の中にいる夫の傍らでの妻と若者の執拗な性交シーンや NO.30 の暗闇のベッドでの過激な描写。

スカトロジはどの様に説明すれば良いのだろうか。また他方で、G.A.Pérouse は Premierfait や Tardif の仏語訳にあるイタリア語からの固有名詞の不器用なフランス語化が *Parangon* にそのまま踏襲されているのを見て「この時期には Poggio と Boccace はまだ十分にフランスの読者(le public français)を獲得していない[21]。」と推測している。この≪public≫が厳密にどこまでの層を指すのか明確でないが(当時の読者と言えば間違いなく知識人のはずである)、本当にそうなのであろうか。先の L.Sozzi は当時 *Décaméron* の写本が多数流布し、Marguerite de Navarre が A.Le Maçon に新たな *Décaméron* の仏訳を依頼したのが 1531 年頃らしいと推定しているし、また、M. Simonin は nouvelle 作家 Masuccio の *Novellino* の写本が 1530 年頃既に Blois の王立図書館に存在したらしいと仮説ながら紹介している[22]。このようなことからイタリアの novella の作家は想像以上に速くフランスの知識人の間に浸透していったのではないだろうか[23]。従って、この Pérouse の指摘についても *Parangon* の編纂者または出版者が固有名詞のフランス語化にあまり注意を払わず、旧来の訳をそのまま使用したに過ぎないと考えることも出来るのではないか。最後に *Ulenspiegel* については上述の経緯から J.Koopmans と P.Verhuyck の校訂による 1539 年版（実際は 1530 年頃）との異同を調査したが特に重要なものは見あたらなかったことを付記しておこう。(注 7 参照)

4.2 構成と内容

Parangon の編纂者は集めた nouvelle を無秩序に配置したわけではなかった。その構成については上の表からいくつかの意図がうかがえる。勿論彼が G.A.Pérouse らの推測するような原典を使用していた事、そして印刷上の技術的都合を考慮しなければのことだが。まず第一に気が付くことは NO.31 までの *Facéties* にほぼ二つ置きに、そして NO.39 までの *Ulenspiegel* に一つ置きに *Décaméron* の nouvelle を一つ配置している。これは恐らく nouvelle の長さを考慮してのことだろう。テク

Le Parangon de nouvelles, op.cit., p.62; p.109

[21] Pérouse G.A., *Nouvelles françaises du XVIe siècle, op.cit.*, p.76

[22] Sozzi L., *op.cit.*, p.xlvi; Simonin M. "De Masuccio aux Comptes du monde adventureux", *op.cit.*, p.43

[23] そもそもこの novella のフランス移入の問題は前世紀末の P.Toldo と G.Paris の論争に端を発している。(参考文献参照) 前者はフランスの nouvelle の起源はイタリアにあると強調、これに対し後者はフランスの伝統、とりわけ口承伝統にあると反論した。Dubuis, Kasprzeyk, Pérouse らは後者の流れを汲んでイタリアの影響力を弱く見る傾向がある。

ストの行数を一つの目安と考えれば *Décaméron* のそれは平均 162.7 行、*Facéties* 35.3 行、*Ulenspiegel* 70.6 行、*Apologues* 34.4 行で編纂者は話の長さの点で読者を飽きさせないようなリズムを作っている。第二に、NO.6 から NO.28 までの *Facéties* の配置の仕方は編纂者が原典から順に二つずつ取って配置したことを推測させる。すると NO.31 の nouvelle の位置が気になるだろう。ここからは全くの推理だがこの NO.31 は元々NO.18 の位置にあり、NO.18 の悲劇の nouvelle は NO.31 の位置にあってもう一つの悲劇の nouvelle NO.33 と対をなしていたのではないか。*Décaméron* からの nouvelle の内容に注目すると、NO.5 と NO.8 は高職者への批判または風刺、NO.11 と NO.14 は巧みな返答で相手をやりこめる話、NO.17 と NO.20 は妻にだまされる夫、NO.23 と NO.26 は自らを反省する人物が主人公、NO.35 と NO.38 は金を借りる事がテーマ、と二つずつ関連を持っている。NO.18 の恋人達の悲劇は NO.31 の位置にあって恋人を殺された娘の悲劇と対になっていた。そして移動が行われた結果,代わりに長い nouvelle として NO.30（214 行）をこの位置に入れた。移動の理由は不明だが、これら *Décaméron* の二つの悲劇は L.Sozzi によると異色で、この時代の他の nouvelle 集に採用されることは稀であったらしい。この事が何か関係しているのかも知れない[24]。尚この NO.18 の nouvelle は *Décaméron* の中では非常に短い話で 79 行しかない。第三に、同じ方向性を持つ nouvelle はある程度まとめられている。NO.5-NO.12 の様々な職業に対しての風刺または批判、NO.11-NO.16 の見事な切り返しとしての返答、NO.14-NO.16 の有名人の登場、NO.22-NO.29 の風変りな人々、NO.39-NO.40 の死と埋葬。多少の例外はあるにせよそれぞれの nouvelle の共通性は強いだろう。第四に、なぜ *Apologues* の nouvelle には先に挙げた nouvelle の交互性が及ばなかったのか。たとえ「羊飼い」「漁師」「占い師」「禿頭の騎士」と人間を主人公にした話を集めているにしても、語りの調子は寓話であるから確かに NO.40 までの nouvelle とはそぐわない。従って「教訓」が直ちに分かる寓話で終わることで「役立つ」作品集として帳尻を合わせたのか、または一旦 NO.40 までの nouvelle 集として完成されていたものを、当時田舎でもその形式内容が知られていたこの Apologues[25] を加えることでより広範な読者を獲得しようとしたのか、はっきりしない。最後に NO.1 から NO.4 の nouvelle についての一つの推理を示せば、

---

[24] Sozzi L., *op.cit.*, p.lv

[25] ナタリー・Z・デーヴィス「印刷と民衆」(『愚者の王国異端の都市』成瀬駒男・宮下志朗・高橋由美子訳、平凡社、1987 年、pp.257-258 .)

NO.1 の nouvelle は劇的な構成とさりげなく教訓を込めたハッピーエンド、そして≪honestes≫な内容という点で NO.26 とともに傑出したものである。編纂者は *Parangon* の題名から考えてこの nouvelle を一番始めに持ってきたかったのだろう。そしてこの誇り高き「人妻」のアンチテーゼとして性欲の衰えない老未亡人と夫をだました妻の登場する nouvelle を NO.3 と NO.4 の位置に、更に、当時話題であったのか Rabelais の *Pantagruel* 33 章にも登場する丸薬療法をパロディ化した nouvelle を NO.2 に置いた。以上の様に考えれば解釈不可能な所もあるが、編纂者には近代の詩集の詩の配列とは言わないまでも相当の配置意図があったに違いない。

内容から見て 47 の nouvelle の内 *Apologues* の七つを除けば、色恋については 14、その内 8 がアンチフェミニズムの色調を帯びている。風刺・批判は多岐の職種に渡り 9、とりわけ宗教関係者に対するものが 5 で一番多い。登場人物の見事と思わせるような才知に満ちた言葉で終わるのが 5、スカトロジーはやはり *Ulenspiegel* に多く 4、≪honestes≫にふさわしい nouvelle は 2、恋愛悲劇は上述した通り 2 となっている。*Décaméron* と *Facéties* からの nouvelle はこの様に内容的にヴァラエティに富んだもので、L.Sozzi によれば *Décaméron* からはよく知られたものを避けつつも多様な nouvelle が集められ, *Facéties* からもコミカルな nouvelle が多いという印象は持つが多様性を失ってはいないらしい[26]。*Ulenspiegel* についてはスカトロジー要素を借りると同時にこのいたずらっ子の冒険話集のクライマックスである死を巧みに組み込んでいる。登場人物も表から分かるように多種多様で、*Parangon* の nouvelle は内容的にかなり網羅的に集められていると言うことが出来るだろう。編纂者はこの nouvelle の多様性を先の配置を使ってより効果的に読者に見せようとしている。

5 結語

Parangon の内容構成の特徴を考察しながらフランス 1531 年当時の nouvelle と言う文学形式の嗜好の一面を探った。「楽しくて何か役に立つ nouvelle」という編纂者の計画は「楽しさ」ばかりが先行した嫌いがあるが、構成にはまとまりを意識し、話の長さのリズムを忘れることなく工夫した配置が見られた。何分資料が少なく結論めいた事を打ち出すまでにいたっていないが、いくつかの問題点は

[26] Sozzi L., *op.cit.*, pp.liv-lvi

浮き彫りに出来たと思う。nouvelle というジャンルの問題、*Parangon* のédition と構成上の問題、そしてとりわけ nouvelle におけるイタリアからの影響は想像以上に複雑な問題をはらんでいそうである[27)]。

参考文献

Baldinger K., "Zum Wortschatz des Parangon de Nouvelles (1531)", in *Zeitschrift für romanische Philologie* No.104, 1988, pp.96-102.

Hauvette H., "Les plus anciennes traductions françaises de Boccace", in *Bulletin italien* VII 1907; VIII 1908; IX 1909.

Kasprzyk K., *Nicolas de Troyes et le genre narratif en France au XVIe siècle*, Klincksieck, Paris, 1963.

— "Les éléments populaires dans la nouvelle française (1500-1550)", IN *Réforme Humanisme Ranaissance* No.11, 1980, pp.43-47.

Loviot L., "Les Joyeuses adventures 1575, 1577, 1582 et 1602", "Les Joyeuses adventures 1555", "Les Joyeuses narrations 1557 et 1596", in *Revue des Livres Anciens* I, 1913-14, pp.210-211; pp.301-302; pp.303-304.

— "Les Cent Nouvelles nouvelles adaptées par La Motte Roullant", in *Revue de Livres Anciens* II, 1917, pp.254-263.

Paris (G.), "La nouvelle française aux XVe et XVIe siècles", IN *Journal des Savants*, mai et juin 1894, pp.289-303; pp.342-361.

Pérouse G.A., *Nouvelles françaises du XVIe siècle*, Genève, Droz, 1977.

Sozzi L., "Les facéties de Pogge et leur influence en France", in *Réforme Humanisme Renaissance* No.7, 1978, pp.31-35.

— "L'Intention du conteur: Des textes introductifs aux recueils de Nouvelles", in *L'Ecrivain face à son public en France et en Italie à la Renaissance*, Actes du colloque international de Tours (déc. 1986), J.Vrin, 1989.

Toldo P., *Contributo allo studio della novella francese del XV e XVI secolo*, Roma, 1894; Slatkine Reprints, 1970.

[27] *Parangon* の全ての版には巻末に *LES PAROLLES Joyeuses et Dictz ... Françoys Petrarcque.* と題する小品が付されているが本稿では扱う余裕がなかった。